

# バーナード・リーチの孫に会いに行ってきた

## Slide Lecture by Philip Leach 「フィリップ・リーチの一日」 見聞録

東京工業大学 博物館 資史料館部門  
特命教授 広瀬 茂久

バーナード・リーチの孫に会いに行ってきた。“A Day in the Life of Philip Leach”というスライド・レクチャー (Slide Lecture) を聞くためだ。お孫さんの Philip Leach (1947～) は英国の Hartland に陶芸工房を構えているが、今回 栃木県益子町の招待で来日した。彼が益子町を訪れるのは4回目だが、今回は特別だ。益子町が始めた「益子国際工芸交流事業 Mashiko Museum Residency Program」の最初の海外アーティストとして、新築の交流館に住み込み、益子の土と窯を使って作陶する機会を得たのだ。作陶の様子は一般公開される。まさしく Artist in Residence だ。新しい形の交流を通して、町の発展にも寄与すると期待されている。

講演は Philip さんの工房 (Springfield Pottery) や 7:30 起床に始まる日常生活、そして代表的な作品の紹介を経て、陶芸家を志すきっかけとなったイラン滞在の話へと続いた。後半では、本題の祖父 Bernard Leach について語られた。ここでは、孫の記憶の中の祖父像を中心に紹介したい。Bernard Leach は、本学出身の濱田庄司 (人間国宝、文化勲章) らと一緒に民芸運動を展開した陶芸家ゆえ、本学ゆかりの人と言えなくもない (写真1)。

### 陶の郷へ

日曜日 (2014年5月11日) の朝早く家を出て、益子に向かった。電車を3回乗り継いで (東急田園都市線・湘南新宿ライン・水戸線・真岡鐵道)、昼過ぎにようやく益子駅に着いた。改札の左手に大きな壺が飾られていた。さすが焼き物の里だ。駅から20分ほど歩いたところに今日の舞台となるレジデンス (益子国際工芸交流館, Mashiko Arts & Crafts Residence) があった。2日前 (5/9) に完成記念式典をやったばかりで、今回がこけら落としのイベントだということだった。木造

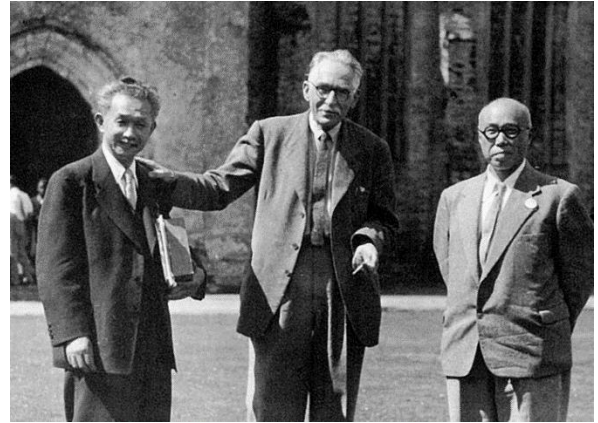


写真1: 左から、柳宗悦 (やなぎむねよし, 1889～1961)、バーナード・リーチ (1887～1979)、濱田庄司 (1894～1979); 1952年7月の国際工芸家会議にて。

平屋作りで、建物の中は板張りの壁を含めて木目が実に美しかった (写真2)。木の香りもほんのりと漂っており、気持ちが和んだ。スリッパに履き替えたが、講師の Philip さんは、スリッパが苦手なのだろう。靴下のままだった。確かにあの平たいスリッパをペタンペタンと履きこなせるのは日本人ぐらいかもしれない。

### 感謝はフルネームで

Philip さんは、講演の冒頭で 今回の企画の中心になった人たちに、一人ひとり名前をあげながら感謝した。Tomoo HAMADA…, Satoshi YOKOBORI…, Yuko MATSUZAKI…という具合に。私たち日本人だと「館長はじめ関係の皆様」に心から感謝します」で済ませてしまうところだが、“心から”の代わりに、しっかり名前をフルネームで言う方が感謝の気持ちがよく伝わるのだ。どうしてこんなことに今まで気付かなかったのだろう。

### イランで開眼した孫の目

Philip さんは、“SON OF A LEACH” と書いた T シャツを着ていた (写真2)。日本人には冠詞の A が気になるところだ。Philip さんの父 Michael Leach (1913～1985) は、その父 Bernard Leach (1887～1979) の作陶を手伝っていたので、Philip さんも小さい時から登り窯の火入れ等に接していた。思春期には父 Michael さんとの確執もあり、いろいろと悩ん



写真 2: 講師 (Philip Leach, 中央) と筆者 (広瀬茂久, 左) は、1947 年生まれの同い年。2014.5.11. 益子国際工芸交流館にて。右は、井村君江 (英文学者、英国の Cornwall 州に住んでいたときは、Bernard Leach に一度会ったことがあり、妻の Janet Leach と親しかった) 写真を撮ってくれた矢田部さんからの情報)。Philip さんが着ている T シャツ “SON OF A LEACH” の由来: Philip さんと親しい Clive Bowen (1943~) (Philip さんの父 Michael Leach の弟子) がイスラエルで講義したときに、学生たちがこの T シャツを着てずらっと並んでいた。「これは Philip にも教えなくては！」ということで、Philip さんも愛用することになった。このエピソードの出典は YM さんが書いた 益子 陶芸 美術館 の ブログ : <http://messeblog.exblog.jp/22596470>。恐らく学生たちは “Son of a bitch” (ゲス野郎) の韻を踏んで、“Son of a Leach” (ナイスガイ) とシャレたに違いない。

だそう。小学校の先生になるつもりで勉強し、教育実習等もこなし教員免許を取得していたが、21 歳の時にとうとう放浪の旅に出ることになった。イランに行くことにしたのだ。特にイランに行きたかった訳ではなく、英国から遠く離れていればどこでも良かったそう。テヘランでは車が壊れ、生活にも困って、アメリカン・スクールで補助教員をさせて貰い生活の糧にした。そんなある日、Philip さんに電話がかかってきた。「イランには知人がいないのに、誰から？」とげげんに思いながら出てみると、American Women’s Club (AWC) のオバさんからだった。「あなた、Bernard Leach と関係あるの?」、「Yes」、「私たちに陶芸を教えて貰えないかしら?」、「No, I cannot.」とは言ってみたものの、お金を稼がないと生活できないので、AWC 陶芸教室の手伝いをすることにした。異国での 1 本の電話が、Philip さんの心の中に漂っていたモヤモヤとした霧を晴らし、生涯の方向を決めるきっ

かけになった。



図 1: Leach ファミリーの工房はイギリス南西端の景勝地にある。Leach Pottery (Bernard Leach, St. Ives, Cornwall), Springfield Pottery (Philip Leach, Hartland, Devon), and Yelland Pottery (Michael Leach, Fremington, Devon)。

結局、イランには 6 年間滞在し、ペルシア文明から多くの影響を受けた。Philip さんの作品の基調の 1 つは、スリップウェア (白色や有色の泥漿状の化粧土 Slip で模様を描き、鉛釉をかけて低火度で焼く陶器) の伝統を受け継いだ素朴な造形美であるが、これは産業革命によって忘れ去られていた英国の古い陶芸が、偶然一冊の本を通して日本人陶芸家の心をつかみ、これも偶然その時に日本に来ていた Bernard Leach を巻き込むことによって、現代に蘇生したものだ。Philip さんは、この西洋と東洋の融合にさらに中東を融合させつつあるのだろう。

イラン滞在中 (1970~1975) も毎年夏には英国に戻り、祖父の Bernard Leach を訪ねた。Philip さんが 8 歳の時に祖父は再婚した (1956)。これを契機に、父の Michael Leach は独立し、家族を連れて引っ越すことにした。住み慣れた Cornwall 州 (英国 西南端) の St. Ives (図 1) から少し北の Devon 州 Fremington に移り住んでからは、祖父とは Family picnic 以外はあまり付き合いが無くなっていた。そんなわけで、20 代になってから再び祖父と過ごしたひとは至宝の時間だったようだ。人間的にも芸術的にも得るものが多かったに違いない。祖父の家からは大西洋に沈む夕日が見えた。その美しい光景

は今も心に焼きついているようだ。

### Travelling is a great source of inspiration

イラン滞在を通してもう1つ体感できたのは、祖父もそうだったように、「旅は創造力の源になる」ということだ。英国に帰って、父 Michel Leach の窯を手伝いながら、自分なりの色合いが出せるようになった時の感慨はひとしおだった。イランで得たものに後押しされ、しばらくして陶芸家として独立する決心をした(1979)。それ以来、Devon 州北部の Hartland に“Springfield Pottery”を構え、同じ陶芸家である妻の Frannie (バハマ出身で、父 Michael Leach の弟子)と一緒にスリップウェアを作っている。技法の中では、「掻き落し」や「櫛描き」が好きだ。表面を削りながら模様を描いていくと作品との間に一体感が生まれるようだ。

2011年にギリシアに滞在した時に見た13世紀のペルシア皿にも魅せられた。あの淡い青を何とか自分のものにしたいと、Cu や Co による着色を種々試み、最近ようやくペルシャン・ブルーを Philip さん流に表現することに成功し、新境地を開きつつある。

### West Meets East

Bernard Leach は東洋哲学的な考え方が好きだったようで、人は機械に頼れば頼るほど生命力を失うと考えていた。彼の母は、彼の出産で命を落とした。そのため彼は祖父母に育てられることになった。彼の祖父が日本で外国人教師をしていた関係で、Bernard Leach は幼少時を京都で過ごした。まさしく、West Meets East の始まりだったのかも知れない。Bernard Leach は真面目な芸術家として知られているが、身近で過ごした孫から見るとユーモアのセンスもあった。こんなことがあったそうだ。あるとき、電話がかかってきて、長話をした後、突然笑い出し電話を切っても大声で笑い続けているので、「何がおかしいの?」と聞いてみると、「いや、笑いはトイレと同じで、何かを排泄し浄化してくれる。思いっきり笑うのがいいんだよ」という返答だったそうだ。これが長生きの秘訣だったのかもしれない(Bernard Leach は92歳まで生きた)。彼は日本料理を自分で作るのも好きだった

そうだ(これも長生きに貢献したに違いない)。

### Philip 坊やの目に映った濱田庄司像

本学出身の濱田庄司(1894~1978)が26歳の時に、7歳年上の Bernard Leach に同行して英国に渡り、セント・アイヴス(St. Ives)に Leach Pottery を作った(1920)。当時の英国では、陶芸は日本ほど高く評価されておらず、Bernard Leach と濱田庄司は東洋と西洋の様式を融合させることにより陶芸の認知度を高めようと努力した。社会に広く受け入れられるようになったのは、50代になった Bernard Leach が本 "A Potter's Book" (1940) を世に出してからだ。この St. Ives を舞台にした思い出話も印象深かった。度々日本を訪れていた祖父のお土産だという大きな風呂敷包みを喜び勇んで開けたら、中から出てきたのは何と煎餅(せんべい)で、その甘塩っぱかった味が祖父に関する最初の思い出だそうだ。祖父にはジャンケンポンも習ったが、これはお土産のせんべい以上に受けたようだ。

濱田庄司に関する最初の思い出は、食事の場面らしい。英国では音を立てないように食事をするのがマナーだ。子供たちは厳しく躰けられる。濱田庄司は(1920年以降も何度か St. Ives を訪問し、夕食に招待されたが)、そんなマナーはあまり気にせず(?),日本と同じようにモグモグズルズルと音を出しながら食べた。大人はビックリした顔をしていたが、子供たちには愉快だったらしい。



写真3: Bernard Leach 「鉄絵組陶板 生命の樹」(1928年)京都市立近代美術館

## Tree of Life

会場には、濱田庄司の孫である濱田友緒(ともお, 1967~)も来ていた。年齢は友緒さんの方が20歳ほど若いですが、孫同士で気が合うのか、Philipさんと同じように、友緒さんにも自分の家の系譜をデザインした陶器を作ってみてはどうかと提案していた。これは、Bernard Leachの作品に繰り返し見られるテーマである生命の樹(Tree of life, 写真3)を説明した後のくだりだったが、これから先4代目、5代目…というように続いて、より美しい模様になっていって欲しいという願いが込められているような気がした。

### Philipさんが陶芸家として大切にしている 祖父 Bernard Leach の言葉

作家と作品は別物だといわれるが、Bernard Leachはそうは思っていなかったようだ。孫のPhilipさんは講演をこう結んだ。The following is one of Bernard's statements that lives with me: The work should be a reflection of the whole man where the heart and mind work together in harmony. 人が作る作品には、機械による量産品とは違って、どうしても作陶時の内面が反映される。メンタル面での修行が必要になるゆえんだ。これが作風となり、その人の作陶家としての存在をより大きなものにするのだと私なりに理解した。

### 世の中に こんな人がいるんだ！

Philipさんの日本訪問は今回で8回目になる。1996年に初めて日本に来て、長野県飯田市でPhilipさん夫妻と川手敏雄(1949~)の3人展を開催したことが忘れられないそうだ。川手さんの作品は素晴らしかったが、それ以上に川手さんの心に打たれたのだ。Philipさんが日本に向けて出発する直前に姉Alisonが50歳の若さで亡くなった。川手家に着いて、食事をご馳走になっていた時に、ふと「今日が癌で死んだ姉の葬儀の日です。姉は生前、『私が死んだら、私が生きた証に(in my memory)カラマツの木を植えて欲しい』とっていました。まだ若かったので残念だったと思います」とPhilipさんがつぶやくと、川手さんはスクッと立ち上がって、「一緒に来ますか?」とあって、裏山に分け

入り、小さなカラマツの苗木を取って来て、庭に植えてくれたというのだ。姉といえど、Philipさんにとっては祖父の思い出と重なる部分が多い。幼少の頃、彼らは孫としてBernard Leachに可愛がってもらったからだ。Bernard Leachは再婚に際し、わざわざ孫たちを呼んで説明したそうだ。特に、思春期の入り口にあった孫娘に対する配慮だったに違いない。Bernard Leachは3度結婚しているが、孫のPhilipさんの記憶にあるのは3度目の方で、祖父は69歳、相手のJanet Darnley(1918~1997)は38歳の陶芸家だった。

法師人弘(ほうしとひろし)館長の開会のあいさつでは、影の立役者も紹介された。世界中からアーティストを呼んでこようという「益子国際工芸交流館」は寄附建物で、しかも運営のために別枠で1億円もの寄附がなされたというのだ(寄附者は、大塚商会創業者の大塚実, 1922~)。強い郷土愛を感じた。本学でも数億円にのぼる山崎貞一基金の例がある。山崎(1909~1998)さんは本学で発明されたフェライトの工業化に尽力し、TDKの社長を務めた人だ。ぐるなび創業者の滝久雄(1940~)も多額の寄附により学生の活動を支援している。筆者が属する資料館が、このように曲りなりにも活動できるのは、名誉教授石戸良治(1932~)の寄附に負うところが大きい。帰路の車中(益子から秋葉原への高速バスの中)で、この見聞記を書こうと思い立った理由の1つだ。

----- 参考 -----



写真 4: 日立ソリューションズ(株)から本学に寄贈された Bernard Leach の黒釉壺。